学苑・日本文学紀要　第九五一号　六四～八三（二〇二〇・一）

馬瀬狂言資料の紹介（12）―「木実論」について―

山本晶子

はじめに

馬瀬狂言の台本で、最も古い文化二（一八〇五）年の年記のある『狂言六義』（中屋豊和氏蔵、以下、馬瀬文化二年本とする）について、調査を進めている。一八曲ある所収曲の中で、「枕物狂」「比丘貞」が和泉流の明和中根本の詞章とほぼ共通すること、「今神明」が和泉流宗家系本と近似すること、一方「鳫礫」は、全体的には江戸後期の和泉流山脇派の詞章を用いながらも、曲の後半に独自の展開を盛り込む等、曲によって詞章の傾向が異なることをこれまで報告した。[1] 本稿では、馬瀬文化二年本の「木実論」[2]を取り上げ、翻刻を付し、その位置づけを明らかにする。本曲は前稿の「今神明」の調査の折、和泉流宗家系本と近似する詞章を有することを指摘したものである。その後、調査を重ねて新たに確認した資料を加え、ここに改めて報告する。また、馬瀬狂言資料の中には、「木実論」の台本がもう一本現存する。中林慶三氏旧蔵『名取川　木実争　三人片輪　太鼓次第一声』に所収されたものである。この詞章も併せて紹介し、馬瀬狂言における本曲の変遷過程についても言及する。

一　「木実論」について

「木実論」は、元々能「花軍」（廃曲）の替間としてあったもので、現行では大蔵流、和泉流共に上演される。曲名の表記が、流儀によって異なり、また内容も異なるところが認められる曲である。大蔵流「菓争」は虎明本以降中絶し、明治になってから復活したもので、橘の精と栗の精が争う内容である。一方の和泉流は、橘の精と茄子の精が花見を共にする中での争いとなる。橋本朝生氏「狂言台本・曲目所在一覧　補遺」[3]に拠れば、和泉流の台本は一〇本（但し、和泉家古本は抜書のみ）あり、更に『狂言集成』[4]にも収められている。上記の台本中で確認できた八本の調査から、本曲は諸本間で共通する詞章が多い曲と認められる。しかし詳細な比較を行うと、まず大きくはⅠ山脇派・Ⅱ三宅派に分かれ、更に山脇派は三つのグループに分けることができる。Aは、江戸前期の台本類で、現在に比べて台本としての形が充分に整っていないものである。Bは、波形本以降、共通する表現（比較的簡潔な詞章）が認められるもので、CはBに共通する詞章を元に、場面によって詳細な描写が認められるものである。[5]

Ⅰ山脇派　A　天理本〈1〉[6]・和泉家古本（抜書のみ）〈2〉

B　波形本〈9〉・和泉流宗家系本〈10〉・『狂言口授箋』〈21〉・和泉流五冊本〈34〉

C　雲形本〈12〉・古典文庫本〈77〉

Ⅱ三宅派　和泉流三宅本〈40〉・愛泉社旧蔵三宅派本〈69〉・『狂言集成』

それぞれの違いについて、具体例を掲げる。まずⅠ山脇派とⅡ三宅派で明らかなのが、橘の精が茄子の精に対して、橘を詠んだ古歌を披露する場面である。ここで用いられるのは、三宅派（『狂言集成』）の場合、

橘は。實さへ花さへ其葉さへ。霜はおくともただときになれ[7]

の歌であるが、山脇派の台本（波形本）では

君が代に。枝もならさで吹風ハ。花橘の匂ひとぞしる[8]

となる。この古歌に代表されるように、曲の展開は共通ながら、個々の詞章に違いがある。馬瀬文化二年本は、この「君が代」の歌が用いられ、詞章全体から見ても山脇派の詞章、中でもBグループに位置づけられることが認められた。山脇派内での違いを見ると、江戸前期の天理本等のAグループは除き、先述の通り、Cグループの古典文庫本では、状況をより詳細に説明する詞章が散見する。その具体例として、馬瀬文化二年本、波形本、古典文庫本の橘の精の名ノリを掲げる。

文　か様候者ハ、橘の精て御座る。承われハあた近きに桜か盛しやと申。今日ハ山へ登つて花見を致ふとそんする。

波　か様に候者は。橘の精てござる。承れハあたり近い山桜がさかりじやと申。今日は山へのぼつて花見をいたさふと存ル。

古　是は橘の精でござる。承れはあたりの草花共さかりぢやと申す。今日は伏見のあたりの花を見物致さうと存る。先、是で休息して花見の衆がみえたらば、詞をかけ同道致さう。近い山桜がさかりぢやと申す。今日は山に登り花見を致さうと存る。

右記の通り、古典文庫本では、周囲の草花の様子を述べ、花見をする場所を「伏見のあたり」とする。またその後、橘の精と茄子の精が道連れとなり、山で桜を眺める場面では、桜の様子を雲に例え、また水の流れに映る花の様子を説明する等、場面描写が丁寧になされる。こうした姿勢は、すでに先行研究[9]で指摘されている、台詞の長大化といった、雲形本の特徴に通じるものであろう。一方のBグループの諸本、波形本、和泉流宗家系本（以下、宗家系本とする）、和泉流狂言五冊本（以下、茶表紙本とする）、『狂言口授箋』は、古典文庫本に比較すると、必要な状況説明のみで、馬瀬文化二年本の詞章も、このBグループと同様の傾向を示した。そこで、馬瀬文化二年本と共通する上記四本との関係を更に明らかにするために、次に各本の異同について述べ、馬瀬文化二年本の位置づけを試みる。

二　馬瀬文化二年本「木実論」について

馬瀬文化二年本と共通する四本との異同をまとめたものが表1「馬瀬文化二年本とBグループ諸本との校異」である。（紙数の都合で、仮名遣い・表記・清濁の違いは示さない）。

〈凡例〉

・馬瀬文化二年本の詞章を元に、Bグループの波形本、宗家系本、茶表紙本、『狂言口授箋』の異同をまとめた。該当箇所は、【翻刻】の馬瀬文化二年本の傍注に

数字を付して示した。

・異同の箇所は、文節の単位を基本にしたが、必要に応じて複数の文節や文で示した箇所もある。また、セリフの初めの「は省略した。

・表中の諸本の順序は、馬瀬文化二年本との共通箇所が多いもの（網掛け箇所）から示し、『狂言口授箋』、宗家系本、茶表紙本、波形本の順とした。

・i欄には馬瀬文化二年本と諸本との関係、ii欄には馬瀬文化二年本を除く他の諸本間の関係、またiii欄には異同の内容を示すため、以下の記号を付した。（なお参考に、その用例数を（　）で示した。）

i　馬瀬文化二年本と諸本との関係

◎…馬瀬文化二年本・『狂言口授箋』・宗家系本の詞章が一致（七四）

○…馬瀬文化二年本・『狂言口授箋』の詞章が一致（三〇）

☆…馬瀬文化二年本・宗家系本の詞章が一致（五）

△…馬瀬文化二年本・茶表紙本の詞章が一致（一七）

□…馬瀬文化二年本・波形本の詞章が一致（二）

●…『狂言口授箋』の詞章が馬瀬文化二年本に近似[10]（一四）

★…宗家系本の詞章が馬瀬文化二年本に近似（一一）

▲…茶表紙本の詞章が馬瀬文化二年本に近似（二）

文…五本の中で馬瀬文化二年本のみ異なる詞章（一一）

授…五本の中で『狂言口授箋』のみ異なる詞章（四）

宗…五本の中で宗家系本のみ異なる詞章（九）

茶…五本の中で茶表紙本のみ異なる詞章（一七）

波…五本の中で波形本のみ異なる詞章（五五）

ii　馬瀬文化二年本を除く諸本間の関係

△□…茶表紙本・波形本の詞章が一致（五五）

☆△□…宗家系本・茶表紙本・波形本の詞章が一致（一一）

○△□…『狂言口授箋』・茶表紙本・波形本の詞章が一致（四）

○☆□…『狂言口授箋』・宗家系本・波形本の詞章が一致（二）

○☆…『狂言口授箋』・宗家系本の詞章が一致、または近似（三）

☆□…宗家系本・波形本の詞章が一致（三）

iii　異同の内容（具体例も示す）

①…語句の違い（No.53「よろこはしい／うれしい」）（八二）

②…語句の有無（No.9「と存る／×（ナシ）」）（四三）

③…助詞、助動詞の有無や違い等の、僅かな違い（No.8「しやうくわん／賞翫を」）（六一）

④…注記（No.1「乱序ニテ出ル 外名乗」）（三二）

⑤…一文の有無、または異なる等（No.40「同道致ふ／いかにも御供いたそふ」）（一七）

馬瀬文化二年本と関係諸本の異同箇所は、全体で二三〇箇所を数えるが、内容が大きく異なる箇所（⑤）はそれほど多くないことが認められる。

これらの中で、馬瀬文化二年本と共通する箇所（網掛け箇所）の数を確認すると、

『狂言口授箋』……一八五箇所（八〇％）

宗家系本……一五五箇所（六七％）

茶表紙本……八五箇所（三七％）

波形本……三二箇所（一四％）

であった。この結果から、馬瀬文化二年本の詞章とより近い台本は、『狂言口授箋』、次いで宗家系本と言えよう。

最も近い関係にある『狂言口授箋』は、近似する詞章の箇所（●）一四箇所を加えると、共通する箇所は約八七％となる。両本の異同（三一箇所）を確認すると、①の語句が異なる箇所は一七箇所あるが、No.12の

表１　馬瀬文化二年本とＢグループ諸本との校異

	馬瀬文化二年本	『狂言口授箋』（○）	宗家系狂言本（☆）	茶表紙本（△）	波形本（□）	i	ii	iii
1	橘　乱序ニテ出ル外名乗	アト橘　外名乗乱序ニテ出ル	アト橘　外名乗乱序マ（ママ）テ出ル	橘	シテ橘　※後注で「ナスシテニスルがよし」	◎	△□	④
2	あた近きに（ママ）	当り近い	傍近い	辺りちかい	あたり近い		○△□	①③
3	桜か	山桜が	山桜か	山さくらか	山桜が	文		①
4	×	廻り	廻ル	×	シカ〜	△	○☆	④
5	色ゝ	さま〜	さま〜	様〜	さま〜	文		①
6	物なれは	物なれバ	なれバ	物なれハ	物なれハ	宗		②
7	皆人	皆人	皆人	皆人の	皆人の	◎	△□	③
8	しやうくわん	賞翫を	賞翫	賞翫	しやうくわん	授		③
9	とそんする	と存る	と存ずる	×	×	◎	△□	②
10	×	×	イヤ	×	イヤ	○△	☆□	②
11	×	×	×	先	先	◎	△□	②
12	笛座ノ向座ス	笛座ノ向エ着	×	×	ト笛ノ上ニ座付ク	●		④
13	シテ茄子	シテ茄子	シテ茄子	シテ	茄子アト	◎		④
14	罷出たるハ（ママ）者ハ	罷出たる者ハ	罷出たる者は	罷出た者ハ	罷出た者ハ	◎	△□	③
15	此かたはらの	此傍の	此辺の	此あたりの	此あたりの	○	☆△□	①
16	×	廻りカヽル	×	×	シカ〜	☆△		④
17	桜の花ハ	桜ハ	桜ハ	桜の花ハ	桜ハ	△		①
18	見事なによつて	見事なに依て	見事なに依て	見事なに依て	見事な物じやによつて	波		①
19	今時分	今時分ハ	今時分ハ	今時分は	今時分ハ	文		③
20	花見桜狩抔と	花見桜狩抔と	花見さくら狩抔と	花見桜狩なと、	花見の桜がりのと	波		③
21	事しや	事じや	事じや	×	事じや	茶		②
22	×	橘、シテ廻りノ内ニ立	×	×	×	授		④
23	×	×	×	×	イヤ	波		②
24	是ゝ	是〜	ヤアなふ〜	これ〜	これ〜	宗		①
25	御座るか	おりやるか	おりやるか	おりやるか	ござるか	□		①
26	中ゝ	中ゝ	いかにも	中〜	中ゝ	宗		①
27	そなたの事しや。	そなたハ	そなたの事じや	そなたハ	そなたハ	☆	○△□	①
28	御ゆきやるそ	おゆきやる	ゆかします	おゆきやるそ	こさる	△●		①③
29	ゆく	行	ゆく	行	出た	波		①
30	事しやか	事じやが	事じや	事しやか	事じやが	宗		③
31	誰ておりやるそ	誰でおりやる	誰でおりやるぞ	たれておりやる	誰じや	☆		③
32	某	某ハ	某ハ	身共ハ	身どもハ	●★	△□	①
33	×	×	×	×	某も	波	△□	②
34	花見	花見	花見	花見物	花見	茶		②
35	くたひれたて	草伏て	草臥て	草臥て	草臥て	文		③
36	休んて居た	休んで居た	休んて居た	休らふていた	休た	◎		①
37	同道仕ふ	同道仕ふ	同道仕ふ	同道せふ	同道せう	◎	△□	①
38	つれかほしいと	連ほしう	独で淋ふつた（ママ）	つれほしう	つれほしう		○△□	③⑤
39	思ふたに一段しや	思ふた。一段じや	×	思ふた。成程	おもふた。いかにも	●		①②
40	同道致ふ	同道致ふ	いかにも御供いたそふ	同道せふ	同道せう	○	△□	①⑤
41	左右あらはゆかしませ	さふあらハゆかしませ	そふあらバいざおゆきやれ	如常シキシテマハル	夫ならハいさおりやれ	○		⑤
42	御先しや	御先じや	×	×	×	○	☆△□	②
43	先ゆかしませ	先ゆかしませ	おゆきやれ	×	先おりやれ	○		①②
44	某から参ふか〜おりやろふ	某から参らふか〜おりやろふ	某から参ろふかやうおりやろふ	×	×	○★	△□	②⑤
45	さア〜来さしませ　心得た	さあ〜来さしませ　心得た	さあ〜きさしませ　心得た	×	夫ならハおりやれ〜	◎		⑤

	馬瀬文化二年本	『狂言口授箋』（○）	宗家系狂言本（☆）	茶表紙本（△）	波形本（□）	i	ii	iii
46	×	廻リ	×	×	×	授		④
47	×	×	×	×	誠に	波		②
48	かけたに	かけたに	かけたに	かけたに	かけた所に	波		①
49	早速	早速	早速	早速	×	波		②
50	同心	同心	同心	同道	同心	茶		①
51	めされて	召れて	めされて	めされて	しておくりやつて	波		①
52	此様な	此様な	此様な	×	此やうな	茶		②
53	よろこはしい	悦しい	よろこばしゐ	うれしい	うれしい	◎	△□	①
54	事ハない	事ハない	事ハない	ト云	事ハない	茶		①
55	×	×	×	×	いや身共もひとりてさひしかつた	波		⑤
56	×	×	×	×	此上ハ	波		②
57	咄そふそ	咄ふぞ	咄そふぞ	咄さふと云	花見をせまいか	◎		⑤
58	×	×	×	×	何様ゆるりと見物せう	波		⑤
59	ワキ座へ行	ワキ座エ行テ	×	×	×	●	☆△□	④
60	イヤ	いや	いや	や	や	◎	△□	①
61	此あたりから	此当りから	此あたりから	此あたりに	あたりに	◎		③
62	×	×	×	はや	はや	◎	△□	②
63	有ルハ	あるハ	有ハ	有	有るハ	茶		③
64	奥山へ	奥山へ	奥山へ	おく山へ	奥へ	波		①
65	廻リ掛リ橋掛ヲ見ル	廻り懸り橋懸りを見る	×	×	×	○	☆△□	④
66	ハヽア	ハヽア	ハヽア	ハヽア	はあ	波		①
67	×	×	×	×	扨も〳〵	波		②
68	見事な事かな	見事な事かな	見事な事かな	見事な事かな	見事でハないか	波		①
69	扨〻	扨〻	扨〻	扨〳〵	扨も	波		③
70	留テ正面見ル	笛座ニテ正面見ル	×	×	×	●	☆△□	④
71	所抔ハ	所抔ハ	所ハ	所抔ハ	所ハ	○△	☆□	①
72	見事しや	見事じや	見事な事じや	見事しや	見事な事ておりやる	○△		①
73	桜しや	さくらじや	桜じや	桜しや	桜ておりやる	波		③
74	おしやる通り	おしやる通り	おしやる通	おしやる通り	×	波		②
75	花の時分ハ	花の時分ハ	花の時分ハ	花の時分ハ	×	波		②
76	只桜計の様に見ゆる	只桜許の様ニ見ゆる	只桜許の様な	たゞ桜計の様に見ゆる	桜計さふな	○△		①
77	×	×	×	むかしからも	むかしの	◎		②
78	言ならハした通り	いゝならわした通り	いひならハした通	いゝならはした通り	云ならハしの通り	波		③
79	言ハ	いふは	云ハ	いふハ	云事が有が	波		①
80	おいやる	おしやる	おしやる	おいやる	おしやる	△	○☆□	①
81	といふ事しや	といふ事じや	といふ事じや	といふ事しや	×	波		②
82	笑	笑	ワラフ	ト云テ笑ふ	ト笑ふ	◎		④
83	わろふそ	笑ふぞ	笑ふぞ	わらふそ	笑ふ	波		③
84	言ふハ	云ハ	ハ	いふ事ハ	いふハ	○□		①
85	咲たに	咲たに	咲たに	盛りに	さかりに	◎	△□	①
86	笑	笑	ワラフ	笑	と笑ふ	波		④
87	×	×	×	×	是〻	波		②
88	おわらやる事ハ	おわらやる事ハ	おわらやる事ハ	おわらやる事ハ	×	波		②
89	なるまい	成まするまい	なるまひ	なるまい	おしやるが	☆△		①③
90	むかしより	昔しより	昔より	むかしより	昔の	波		③
91	和歌に	和哥に	和哥に	本哥に	本哥などにも	◎		①
92	事しや	事じや	事じや	哥しや	ぞや	◎		①
93	其古歌ハ	其古哥ハ	其古歌ハ	本哥ハ	本哥ハ	◎	△□	①
94	事しやの	事じやの	事じやの	哥しや	×	◎		①②
95	おしりやるまい	おしりやるまい	おしりやるまい	しるまい	知るまい	◎	△□	①
96	キンスル	吟ズル	吟スル	×	×	◎	△□	④

	馬瀬文化二年本	『狂言口授箋』（〇）	宗家系狂言本（☆）	茶表紙本（△）	波形本（□）	i	ii	iii
97	花の	花の	花の	×	花の	茶		②
98	くわいた	くわいた	くわひた	くわした	くわした	◎	△□	①
99	笑	笑	笑テ	笑	ト笑い	○△		④
100	おわらやる	おはらやる	おわらやる	笑ふ	笑ふ	◎	△□	①
101	なりまするまい	成増るまい	なるまい	成まい	なるまい	○	☆△□	③
102	×	×	×	忝も	×	茶		②
103	黒主の哥ハそれかしもよふ存して居る	黒主の哥ハ某が能存ている	黒主の哥ハ某が能ぞんじて居る	おぬしかしらぬによつてしや。本哥をお知りやらすハ、いふてきかせふ。	お主がしらぬによつてじや。本哥をお知りやらずハ、いふて聞せう。	●★	△□	③⑤
104	数盛そむる	数咲初むる	数咲そむる	かす咲そむる	かす咲初る	文		③
105	あれ	あれ	有	あれ	よまれたれ	波		①
106	笑	笑	笑テ	笑う	ト笑	○△		④
107	やい〳〵	ヤイ〳〵	やい〳〵やいそこな者	やい〳〵	やい〳〵	宗		①
108	何しや	何じや	何じや	×	×	◎	△□	②
109	是ハ	是ハ	是ハ	是ハ	夫ハ	波		①
110	成まいそ	成まいぞ	成まひぞ	なるまいそ	なるまい	波		③
111	何事しや	何事じや	何事じや	何とした事しや	何とした事じや	◎	△□	①
112	某て	某でハ	某でハ	おれてハ	おれデハ	●★	△□	①③
113	いらぬ事を言ふ	いらぬ事を云ふ	いらぬことをいふ	いらぬ事をいふ者か有ル	×	◎		⑤
114	×	×	×	×	いや	波		②
115	昔より	昔より	昔より	昔より	×	波		②
116	事ハ	事ハ	事ハ	事ハ	事	波		③
117	事しやいやい	事じやいやい	事じやゐやい	×	×	◎	△□	②
118	×	×	×	×	先	波		②
119	哥しや	哥じや	哥じや	哥しや	哥が有	波		①
120	君か代に枝もならさて吹風ハ花橘のにほひにそ知る	君が代に枝もならさで吹風ハ花橘の匂ひにぞ知る	君か代に枝もならさて吹風ハ花橘の匂ひにぞしる	ゆくすゑハ幾万代ととふてまし山橘の実こそしるらめ（此哥ワロシヲクニ印有）	君が代に。枝もならさで吹風ハ。花橘の匂ひとぞしる	◎		③⑤
121	か様に	ケ様に	か様に	か様の	かやうに	茶		③
122	×	×	ついに	×	×	宗		②
123	貴人高位も	貴人高位も	貴人高位も	貴人高人の	貴人ン高人ンの	◎	△□	①
124	御喰事ニ	御食事に	御喰事ニ	喰事にも	喰事にも	◎	△□	③
125	なされ	被成	被成	なり	なり	◎	△□	③
126	皆人	皆ひと	皆人	皆人の	みな人の	◎	△□	③
127	なれハ	なれハ	なれバ	有れハ	なさるゝ	◎		①
128	なるまいそ	なるまいぞ	成まいぞ	なるまい	成まい	◎	△□	③
129	貴人高位に	貴人高位に	貴人高位に	貴人高人に	貴人ン高人ンに	◎	△□	①
130	今こそ	×	×	今こそ	今	△		②③
131	とかくハない	とかくハない	兎角ハない	とかくハない	×	波		②
132	御前へに	御前に	おまへに	前に	前にも	◎		③
133	植置せられせられ（ママ）	植置せられ	植置せられた	植おかせられ	植おかせられ	宗		③
134	橘とて	橘とて	橘とて	橘とて	橘と	波		③
135	つゝく	つゞく	つゞく	つゝく	とゞく	波		①
136	ならふか	成ふか	なろふか	有ふか	有ふか	◎	△□	①
137	おのれをこそ	おのれをこそ	己をこそ	おのれをこそ	おのれ	波		③
138	一礼を	一礼を	一礼を	一礼	一礼を	茶		③
139	仕い	仕イ	仕れい	せい	せい	◎	△□	①
140	何の	何	何の	何の	なんの	授		③
141	一礼を	一礼を	一礼を	一礼	一礼を	茶		③
142	仕ふそ	仕ふぞ	せふぞ	せふ	せう	○	△□	①

	馬瀬文化二年本	『狂言口授箋』（○）	宗家系狂言本（☆）	茶表紙本（△）	波形本（□）	i	ii	iii
143	一礼	一礼	一礼を	一礼を	一礼を	○	☆△□	③
144	見せふ	見せふ	みせふ	見せるそよ	見するぞ	◎		③
145	笑	笑	笑テ	笑テ	×	○		④
146	ものを	物を	ものを	物	物を	茶		③
147	おそろしかろふそ	をそろしからふぞ	さぞこわかろふ　ていど云か　てひどいふたらバ何とする	おそろしからふ	こハからうぞ	○▲		①③⑤
148	やつの	やつの	やつの	やつの	やつ	波		③
149	ほうりやうも	ほう量が	方量が	ほうりやうも	ほうりやうが	△		③
150	×	×	×	×	トタヽク	波		④
151	×	×	×	某か	それかしが	◎	△□	②
152	いさこい　さアこい	いざこい　さあこい	さあこひ　いざこひ	×	×	○★	△□	⑤
153	相撲之様ニ組合イヤ〳〵	両人角力ノヨウニ組合フ。イヤ〳〵。	両人角力の様ニ組合	×	ト又タヽク	●★		④
154	まつ	まつ	まつ	×	×	◎	△□	②
155	おかふ	置ふ	置たがよひ	おいたかよい	おいたがよい	○	☆△□	①
156	ナスヒヲコカシ扇デタヽク	茄子ヲコカシ扇ニテタヽク	茄子をコカシ扇ニテタヽク	×	相撲にナリ、打コカシタヽク	◎		④
157	おのれ	己レ	己	×	×	◎	△□	②
158	それかしを此様に打擲をした程に、今に目に物を見せふそ	某を此様ニ打擲をした程ニ、今に目に物を見せふぞ	某を此様に打擲した程に、今に目に物をみせふぞ	某を此ことくちやうちやくした程に、今に目に物を見せふそ	×	◎		⑤
159	おのれまた其つれな事をゆふ	己レまだ其つれな事を云	己また其つれをいふ	×	×	○★	△□	⑤
160	またそこにおるか〳〵	まだそこにおるか〳〵	またそこにおるか〳〵	またそこにおるか〳〵	×	波		⑤
161	橋掛マテ追込テ戻ル	橋ガヽリマデ追入レテ戻ル	ハシカゝリ迄追入レテモドル	×	×	●★	△□	④
162	中入	中入	中入	×	中入	茶		④
163	事かな	事かな	事かな	事しや	やつの	◎		①③
164	者をものを（ママ）	者を	ものを	者ハ	やつハ	◎		①③
165	ほうりやうも	ほう量が	方量か	ほうりやうか	ほうりやうが	文		③
166	ないによつて、今のようにした	ないに依て、今の様にした	ないに依て、今の様にした	ないに依て、今の様にした	ない	波		⑤
167	きみしや	気味じや	気味じや	気味しや	きみに成た	波		①
168	×	×	さらバ	×	×	宗		②
169	某はかり	某計り	某計	某はかり	□□に某一人	波		①
170	緩りと	ゆるりと	ゆるりと	×	×	◎	△□	②
171	又笛座ノ向ヘ座ス	又笛座ノ向ニ着ク	×	ト云テ	ト笛上へ□ハル	●		④
172	せられた事そ	せられた事ぞ	せられたことそ	しられた事そ	せられたしらぬ	◎		①
173	とれ	どれに	どれに	とれに	とれに	文		③
174	居らるヽそ	居らるヽしらぬ	居らるヽしらぬ	いらるヽしらぬ	いらるゝしらぬ	文		①
175	いや	イヤ	イヤ	×	×	◎	△□	②
176	のふ〳〵	のふ〳〵	なふ〳〵	なふ〳〵なふそこな者	なふそこな人	◎		⑤
177	何事しや	何事じや	何事じや	何事そ	何事をいわします	◎		③⑤
178	せられて	させられて	させられて	めされて	めされて		○☆／△□	①
179	召れたと	召れたと	めされたと	しやつたと	しやつたと	◎	△□	①
180	何とした事しや	何とした事じや	何とした	何とした事そ	何とした事てござる	○		②③
181	打擲を	打擲を	ちやうちやくを	ちやうちやく	ちやうちやく	◎	△□	③
182	せいを	精を	精を	精共をハ	精どもを	◎		①
183	今に	今	今	今に	今	△	○☆□	③
184	有る	云ぞ	云そ	×	言事てござる		○☆	①②

	馬瀬文化二年本	『狂言口授箋』（○）	宗家系狂言本（☆）	茶表紙本（△）	波形本（□）	i	ii	iii
185	たとへ	たとへ	たとへ	たとへは	たとへ	茶		①
186	有て	有て	あつても	有て	有ても	○△	☆□	③
187	大勢くると	大勢くると	大勢来ると	大勢押寄ると	大勢の事じやと	◎		⑤
188	聞たによつて	聞たニ依て	聞たに仍て	聞た。夫故	聞た。夫故	◎	△□	①
189	拵を	拵を	拵を	こしらへを	身こしらへを	波		①
190	さしませ	さしませ	さしませ	めされ	さしませ	茶		①
191	夫ならは心得た先是へよらしませ	夫ならバ心得た先是へよらしませ	そうあらバ心得た先是へよらしませ	×	夫ならハともかくもておりやる	○★		⑤
192	ワキ座ヘ並フ。ウシロヘ向也	ワキ座ニ坐ス。ウシロ向也	×	×	トヱほし取、作り物着テ棒持	●		④
193	こなたハ	そなたハ	そなたハ	おぬし	×	●★		①②
194	油断な者しや	油断な者じや	油断なものじや	油断ト云	×	◎		①②
195	×	×	×	×	そなたハよふこそ知らせておくりやつたれ	波		⑤
196	知せすハ	しらせずバ	しらせすハ	しらせてくれすハ	知らせてくれずハ	◎	△□	①
197	思ひかけハ	思ひがけハ	思ひかけハ	思ひかけか	おもひがけが	◎	△□	③
198	真中へ出ル	真中へ出ル	×	×	×	○	☆△□	④
199	何と拵ハよふおりやるか	なんと拵ハ能おりやるか	何と拵ハよふおりやるか	是てよふ御座る	×	◎		②⑤
200	向合ス　大方よふ御りやる	向合テ　大方能おりやる	大方能おりやる	×	×	●★	△□	⑤
201	こなたもすいふん	こなたも随分	こなたも随分	随分こなたも	×	◎▲		②
202	おくりやれ	おくりやれ	おくりやれ	下され	×	◎		①②
203	おしやるな	おしやるな	おしやるな	さしますな	さしますな	◎	△□	①
204	×	×	×	×	それがしも情を出して随分ふせいてやろふぞ	波		⑤
205	×	×	×	まつ	先	◎	△□	②
206	待ませふ	待ませう	待ませふ	まちかけませふ	待しませ	◎		①
207	ワキ座ニ並ヒ立ツ	ワキ座ニ並ビ立	×	×	×	○	☆△□	④
208	一段とよからふ	一段と能らふ	一段とよかろふ	×	×	◎	△□	⑤
209	橋掛ニテ謡	橋がゝリにて謡フ	橋カゝリニテ諷フ	×	×	◎	△□	④
210	一セイツヨク	一セイツヨク	一セイツヨウ	一セイ　ツヨ	一ノ松、一セイ	◎		④
211	恨みそと	恨ぞと	恨ぞと	うらみぞと	恨とて	波		③
212	立テ居テ	立テイテ	×	×	×	○	☆△□	④
213	せいわ	勢ハ	勢を	せいハ	勢ハ	宗		③
214	是を見て	是を見て	みて	是を見て	誰ゝぞ	○△		①
215	打切	×	打切	×	×	☆	○△□	④
216	たてにハつへを	たてにハつへを	たてにハ杖を	たてにハ杖を	蓼枇杷杖を	波		①
217	×	×	×	×	二人棒持カゝル	波		④
218	とれ〳〵そ	誰ゝぞ	誰ゝぞ	たれ〳〵そ	誰〳〵ぞ	文		①
219	打切	打切	打	×	×	○	△□	④
220	山枡	山枡	山桝	山桝	山椒の	波		③
221	ふかけれと	深けれども	ふかけれ共	ふかけれ共	ふかけれ共	文		③
222	ゑいたう〳〵	ヱイトウ〳〵。	ヱイトウ〳〵。	エイトウ〳〵ト云テ　カゝル	ヱイトウ〳〵トカゝリ	◎		④
223	同音「ゑい〳〵をゝ	同音「ヱイ〳〵ヲゝ	同音「ヱイ〳〵ヲゝ	タチ「エイヤ〳〵エイ〳〵ヲフ	タゝキ合	◎		⑤
224	×	×	×	ノク	×	茶		④
225	×	×	×	いて物見せんとかゝりけり	いで物見せんとかゝりけるト	◎	△□	⑤
226	舞働	舞働	舞働	×	舞ハタラキ	茶		④
227	ふくやと	吹やと	吹やと	ふくやと	かくやと	波		①
228	さむきハ	さむきハ	さむきハ	さむさハ	寒さは	◎	△□	③
229	山の	山の	山の	山の	やまぬ	波		①
230	木の実の精か	木の実の精ハ	木の実の精ハ	木のみのせひハ	木の実の精ハ	文		③

文　是にやすんて、追付山へ登ふとそんする　笛座ノ向座ス

授　是ニ休んで、追付山へ登ふと存る　笛座ノ向ェ着（傍線は稿者。以下同じ）

や、No.183「今に／今」やNo.193「こなたハ／そなたハ」等、意味はそれほど変わらない例が多い。またNo.38、39の

文　某もつれかほしいと思ふたに一段しや

授　某も連（ツレ）ほしう思ふた。一段じや

といった助詞の有無等が挙げられる程度で、ほぼ共通する詞章と言えるだろう。この『狂言口授箋』は、所収曲が五一曲で、台本の書写年は不明であるが、三冊目の奥書に、

弘化四丁未十一月十三日夜得之書舗百架堂／十四日朝一看過　要斎

という記事があることから、弘化四（一八四七）年に要斎が入手したことは明らかで、それ以前の成立と考えられる。[11] 今回比較したBグループ内の台本の中で、馬瀬文化二年本と『狂言口授箋』は、注記の箇所（No.1、192等）が多い。その中でも『狂言口授箋』の数が僅かながら多く、詳細にまとめられた台本と言える。

『狂言口授箋』と馬瀬文化二年本の関係について、「木実論」以外の所収曲を調べると、両本にある曲は「井杭」「木六駄」「佐渡狐」「比丘貞」の四曲である。その中で「比丘貞」の詞章は馬瀬文化二年本のものとほぼ一致した。この曲は先述の通り、明和中根本と共通する詞章であり、『狂言口授箋』も同じ詞章を有することになる。更に「井杭」も、明和中根本の詞章と一致した。『狂言口授箋』と明和中根本の関係は、これまで指摘されていなかったが、更に調べる必要があろう。従って、馬瀬文化二年本と詞章が一致する曲は、「木実論」と「比丘貞」の二曲となる。（なお、「井杭」「木六駄」「佐渡狐」は、『狂言口授箋』の詞章との共通性はあるが、一致するものではないため、調査を継続している。）これまでの報告の通り、明和中根本は馬瀬文化二年本の関連資料として着目していたもので、この『狂言口授箋』との関係も含め検証を進める。

また『狂言口授箋』に続き、馬瀬文化二年本との関係が近いのが、前稿でも共通の詞章が認められた宗家系本である。馬瀬文化二年本と近似する★の箇所（一一）を加えると、約七二％が共通する。「今神明」と同様に、馬瀬文化二年本と近い関係にある台本と言える。「木実論」以外で両本に所収された曲は、「鞍馬参」「胸突」「鳫礫」「三人長者」「三人片輪」「飛越」があるが、各曲の詞章に共通性は認められるものの、「木実論」等のような詞章の近さはない。今後は『狂言口授箋』と同様に、宗家系本についても、馬瀬狂言資料との関係性を明らかにする。

こうした馬瀬文化二年本、『狂言口授箋』、宗家系本の関係の近さは、装束付の記事でも明らかである。表2は各本の装束付をまとめたものである。各装束の記載順は、馬瀬文化二年本の形に合わせ、比較しやすくした。

装束付の内容は、諸本間でそれほど大きな違いがあるものではないが、上記三本はほぼ共通した内容である。また、いずれの諸本にもこの装束付の後に、以下の和歌についての注記が示される。

万葉集ニ清輔之歌　此哥吉

君か代に枝をならさて吹風ハ花たちはなの匂ひにそしる

表２「木実論」の装束付

	馬瀬文化二年本	『狂言口授箋』	宗家系狂言本	茶表紙本	波形本
茄子	着付 段のしめ ク丶リ袴 袍壺折 面ウソ吹 頭巾	着付 段のしめ ク丶リ袴 箔壺折 面嘘吹 頭巾	着附 段のしめ ク丶り袴 箔壺折 面ウソフキ 頭巾	着付 段のしめ ク丶リ袴 ハク壺折 面ウソフキ 頭巾 コシヲヒ	着付 ク丶リ袴 ハク壺折 面ウソフキ ガヲシ頭巾
茄子・後	ソハツキ 黒タレ 割ハサミ持 茄子作り物を戴ク	ソバツキ 黒タレ 割ハサミ持ツ 茄子ノ作り物戴ク	ソバツキ 黒タレ 割ハサミ持 茄子ノ造り物頂ク	ソハツキ 黒タレ ワリハサミ持 茄子ノ作り物	ソハツギ 黒タレ ワリバサミ持出ル 黒タレノ上ニ茄子 ノ作り物イタ丶ク
橘	小袖　小格子 狩衣 大口 白タレ 風折烏帽子 面鼻引か登り髭か	小袖　小格子 狩衣 大口 白タレ 風折烏帽子 面鼻引か登り髭か	小袖　小格子 狩衣 大口 白タレ 風折ゑぼし 面鼻引か登髭か	着付のしめ 掛素袍か狩衣か 白タレ 風折 面ノホリヒケカ ハナヒキカ	袴 カリ衣 大口カ半切カ 白タレ 金風折 面上り髭
橘・後	橘の作り物を戴ク 棒をもつ	記載なし	橘ノ造リ物頂ク	橘の作り物　棒	記載なし
柿	小袖嶋かあつ板か く丶り袴ニ掛ケ素 袍か 但シモキトウニテモ 頭巾異風か吉 面賢徳赤キ色か吉 後ハタスキ掛ル かつら帯ニテ	小袖しまか厚板か く丶リ袴ニ掛素袍 か 但シモギドウニテモ 頭巾異風ニナルガヨシ 面ケントク赤キ色 が吉 後葛帯ニテタスキ 掛ル	小袖嶋か厚板か ク丶リ袴　懸素袍 但モギドウニテモ 刀 頭巾異風成か吉 面けんとく赤キ色 かよし 後タスキカクルサ 帯ニテ　（ママ）	着付シマ モキトウ 頭巾 面見合　赤キケ ントクカ 後タスキカツラ 帯也 柿ノ作リモノ	着付 モギトウ ガウシ頭巾 面ケントク赤キヲ 着ベシ 後タスキカケ柿ノ 作り物 棒持
立衆	小袖見合せ ク丶リ袴 水衣又ハモキトウ 黒タル（ママ） 又ハ色〻頭巾 毛頭巾抔モ吉	小袖見合せ ク丶リ袴 水衣又ハモギドウ 黒タレ 又ハ色々ノヅキン 毛頭巾抔モ吉	小袖見合 ク丶リ袴 水衣又ハモギドウ 黒タレ 又は色〻ノ頭巾 毛頭巾抔もよし	着付シマ ク丶リ袴 水衣 黒タレ 面見合	ク丶リ袴 水衣又ハモギドウ 羽織イロ〳〵有へし 面ミナウソフキ ケントク見合 ミナ頭巾ノ上ニツク リ物イタ丶クベし

行末ハ幾万代もとふくまし（ママ）花橘の実こそしるらめ
此哥已前ハ用ひ候へ共わろし

茶表紙本のみ本文中に「行末ハ」の和歌が示され、「君か代」の和歌を注記で示す形となっている。装束付と共に、この記事があることもBグループの特徴である。

一方で、Bグループ内で馬瀬文化二年本との共通箇所が少ないのが、波形本である。波形本のみ異なる詞章が五二箇所と、異同の箇所全体の四分の一を占める。その中で、この本文の精確さが認められる箇所がある。最後の謡いの場面（No.227・229）で、波形本の詞章は、下記の通りである。

ゑいその風もかくやと計あら〳〵寒や、あら寒や、あそこや爰に蟄（カヾメ）ども、寒さハやまぬ、木の実の精ハいかならん

傍線部「かくや」「やまぬ」とある箇所が、他の諸本は「吹くや」「山の」となる。この箇所は和泉流最古の天理本では、

ゑいそのかせもかくやとはかり、あら〳〵さむや、あらさむやと、あそこや爰にかゝめ共、さむさわやまぬ、木の実のせいはいかならん

となり、古典文庫本、『狂言集成』の詞章も天理本と共通する。詞章の意味するところからも、波形本の形が古くからの精確な表現と考えられる。これに類するものとして、No.216「蓼枇杷杖を」等がある。このような事例から、波形本を除

く、馬瀬文化二年本以下の諸本は、やや精確さに欠ける面があることが指摘できよう。

この波形本との近似性が認められる台本が、茶表紙本である。ii欄の諸本間で共通する箇所の中で、茶表紙本と波形本が共通していることを示す△□の数は五五箇所となり、また両本と『狂言口授箋』や宗家系本とそれぞれ共通する箇所である○△□（四箇所）、☆△□（一一箇所）の数を合わせると、七〇箇所となる。上記の結果を総合すると、馬瀬文化二年本とより近い関係にあるのが『狂言口授箋』・宗家系本である。また波形本と茶表紙本の二本が近い関係にあることが明らかになった。

三　馬瀬中林本「木実論」の位置づけ

馬瀬狂言資料の中で現存するもう一本の「木実論」の台本が、中林慶三氏旧蔵の『名取川　木実争　三人片輪　太鼓次第一声』（所蔵番号　中林慶三三〇ノ一四、以下、馬瀬中林本とする）である。年記はないため、成立年代は不明であるが、書名の「木実争」という表記が上演資料[12]と共通することから、上演のあった明治末年頃のものではないかと推測される。内容は表題の通り、「名取川」「木実争」「三人片輪」の三曲と太鼓の手付（次第と一声）が所収されている。この中で「三人片輪」は途中で記述が途絶え、太鼓の手付に移行している。馬瀬文化二年本との比較の結果、馬瀬中林本は、馬瀬文化二年本の詞章を継承しながら、表現を簡略化する等、改めた箇所が認められる。

両本の校異をまとめたのが、表3「馬瀬中林本と馬瀬文化二年本の校異」である。

〈凡例〉

・異同の箇所は、【翻刻】の馬瀬中林本の傍注に数字を付して示した。

・異同の箇所は、表1と同様に、文節の単位を基本にしたが、必要に応じて複数の文節や文で示した箇所もある。

・違いの欄の丸数字・記号の内容は以下の通りである。（なお参考に、その用例数を（　）で示した。）

a…該当箇所の有無（七二）　該当箇所がない項目は網掛けとした。

b…一文の表現が異なる（一八）

c…語句の違い（七六）

d…助詞、助動詞の有無や違い（三三）

e…その他（誤字等の誤りを含む、同じ語の言い方が異なる等）（一四）

★馬瀬文化二年本がより高い敬意を示す表現（四）

☆馬瀬中林本がより高い敬意を示す表現（一七）

まず上記二本の異同が二一三箇所で認められた。最も多いのが、aの該当箇所の有無で、総数の三分の一を占める。このaの七二箇所の内、該当箇所がないものは、馬瀬中林本は四三箇所、馬瀬文化二年本は二九箇所となり、馬瀬中林本の数が多い。その詳細を見ると、一三箇所が注記の有無の違いに拠るもので、馬瀬文化二年本にある注記がほとんどない。また馬瀬中林本では、馬瀬文化二年本の注記を具体的に示した箇所がある。No.86やNo.94の「ハ……」は、馬瀬文化二年本で「笑」とされていた箇所である。このような例は、他にNo.146の

中　「イヤア。「イヤア。「とつたぞ。「是は何とする。「何と、云ふ事かあるものか。

文　相撲之様ニ組合

	馬瀬中林本	馬瀬文化二年本	違い
47	御先きしやもの	御先しや	d
48	こなたから御出でなされませ	先ゆかしませ	b☆
49	さうあらバ	×	a
50	御座りませう	おりやろふ	c☆
51	ごされ	来さしませ	c★
52	心得ました	心得た	d☆
53	御座らぬ	ない	c☆
54	一人でハ	独りハ	d
55	今日た	互に	c
56	見物致しませう	咄そふそ	c☆
57	×	ワキ座へ行	a
58	一段とよふ御座りませう	×	a
59	ハヽア	イヤ	c
60	心得ました	心得た	d☆
61	×	廻リ掛リ橋掛ヲ見ル	a
62	×	見事な事かな	a
63	×	扨〻	a
64	御座る	おりやる	c
65	×	留テ正面見ル	a
66	所が	所抔ハ	c
67	一としゆふ	一しを	e
68	所が	所ハ	d
69	×	いつれ	a
70	×	花の時分ハ	a
71	×	只	a
72	×	誠に	a
73	此	此様な	c
74	×	扨〻見事な事しや	a
75	×	ヤ	a
76	仰せらるヽ	おいやる	c☆
77	なんじや	×	a
78	ハ……	×	a
79	やあ	×	a
80	こなたわ	そなたハ	c
81	おわらやるぞ	わろふそ	d☆
82	はしりほに咲た	はしりほ	c
83	実乗り（ママ）作の	耕昨の	e
84	上に	上にこそ	d
85	いつのならいに	花の咲たに何そや	b
86	ハ……	笑	c
87	やあこれ〳〵	其様におわらやる事ハなるまい	b
88	歌に	和歌に	c
89	×	様〻	a
90	歌ハ	古歌ハ	c
91	歌しやの	事しやの	c
92	×	キンスル	a
93	加へた	くわいた	e
94	ハ……	笑	c
95	やあこれ〳〵	其様におわらやる事ハなりまするまい	b
96	歌で御座るそや	哥しや	d☆
97	さき初むる	盛そむる	c
98	云とこそ	とこそ	c

表３　馬瀬中林本と馬瀬文化二年本の校異

	馬瀬中林本	馬瀬文化二年本	違い
1	×	乱序ニテ出ル　外名乗	a
2	あなた	あた（ママ）	e
3	申すに依て	申	c
4	登り	登つて	d
5	数々	色〻	c
6	桜の花ハ	桜ハ	c
7	ひとしゆふ	一しほ	e
8	見事しやに依て	見事な物なれは	c
9	人皆な	皆人	c
10	御賞感	しやうくわん	e☆
11	いや	×	a
12	内	中ニ	d
13	やすろふで居て	やすんて	c
14	×	笛座ノ向座ス	a
15	罷出でたる者は	罷出たるハ（ママ）者ハ	e
16	山桜が盛りじやと申す	毎年春に成レハ、此かたはらの山桜を見物ニ参る。漸〻盛りしやと申程に	b
17	今日た山へ登り	×	a
18	花見を致さふ	花見に参ふ	c
19	花ハ数々多けれとも	花の中ヵにも	c
20	ひとしゆふ	×	a
21	見事しやに依て	見事なによつて	d
22	此頃	今時分	c
23	人皆御賞感なさるヽ	殊の外賑〻敷事しや	b
24	×	さくらの花にあやかりたい事しや	a
25	イヤ	×	a
26	何者やらか	何者やら	d
27	通る	参つた	c★
28	やあのふ〳〵	×	a
29	ハヽア	×	a
30	いかにも	中〻	c
31	事じやが	事しや	d
32	御出でなさるヽ	御ゆきやるそ	c
33	花見が為め罷出でたが	山桜か見事に咲たと聞たによつて、見物にゆく事しやか	b
34	こなたか（ママ）	そなたハ	c
35	何で	誰て	c
36	御りやる	おりやるそ	d
37	罷出でた	罷出たか	d
38	くたひれて	くたひれたて	e
39	やすろふで	休んて	c
40	致さふ	仕ふ	c
41	×	某もつれかほしいと思ふたに一段しや	a
42	いかにも	×	a
43	致しましよふ	致ふ	d☆
44	先ず	×	a
45	御出でなされませ	ゆかしませ	c☆
46	こなた	×	a

	馬瀬中林本	馬瀬文化二年本	違い
146	イヤア。 イヤア。 とつたぞ。 是は何とする。 何と丶云ふ事かあるものか。	相撲之様ニ組合 イヤ〳〵。	b
147	うのれ	おのれ	e
148	置いたかよい	おかふ	c
149	×	ナスヒヲコカシ扇デタ丶ク	a
150	あいた〳〵	×	a
151	うのれ	おのれ	e
152	打のべを	打擲を	c
153	して	した程に	c
154	見する	見せふそ	c
155	うのれ	おのれ	e
156	つれを	つれな事を	c
157	是に	そこに	c
158	〳〵〳〵〳〵〳〵	橋掛マテ追込テ戻ル	b
159	につくいやつの	×	a
160	にが〳〵しい事で御座る	にくい事かな	b☆
161	者に	者をものを（ママ）	d
162	物を云わせて置けハ	只おけは	c
163	法量か	ほうりやうも	d
164	×	扨〻よひきみしや	a
165	見物致さふと	花見を	c
166	存る	×	a
167	×	又笛座ノ向ヘ座ス	a
168	扨て〳〵にか〳〵しい事て御座る	のふはらたちや〳〵	b
169	今に目に物を見するぞ〳〵。茄子中入	今にくやまふそ〳〵。中入	b
170	何と云ふぞ	夫ハ誠か、扨〻にか〳〵しひ事しや	b
171	只今茄子の性（勢）と喧嘩をせられ、さんゞ〳〵打のべをせられた丶かれて、腹が立つとあつて、大勢木の実の勢をかたろふて、押寄せてくる（ママ）ある	何としてけんくわをせられた事そ	b
172	はて	×	a
173	此の	×	a
174	居るそしらぬ	とれ居らる丶そ	c★
175	やあ	いや	c
176	おひたゞしひ	扨〻あわた丶しい	c
177	あらふか	あるものか	c
178	打のへを	打擲を	c
179	せられた	召れた	c★
180	聞きましたが	聞たか	d☆
181	事で御座る	事しや	d☆
182	されバの事て御座る	されハ	c
183	今の様にした	それゆへ打擲をした	b
184	とあつて	ゆふて	c
185	×	今に	a
186	先ず是へ寄つてこしらへをさしませ	×	a

	馬瀬中林本	馬瀬文化二年本	違い
99	い（ママ）の	いつの	e
100	×	花の	a
101	ハ……	笑	c
102	おふ	×	a
103	それハ	是ハ	c
104	あらふに	あろふか	d
105	茄子	茄子の	d
106	某かしを	身共を	c
107	なるまい	成まいそ	d
108	×	ものしや	a
109	あさしい（ママ）	賤しい	c
110	何しや	何事しや	c
111	夫がしてない	某てない丶やい	d
112	×	いらぬ事を言ふ	a
113	事じや	事ハ	d
114	×	数限りもない事しやいやい	a
115	×	夫ハ何といふ哥しや。君か代に枝もならさて吹風ハ花橘のにほひにそ知ると、か様に目出度哥も有ルか、そちか様な物を、哥によまれた事ハ聞た事かない	a
116	×	いや	a
117	×	それかしハ	a
118	何れの	いか成	c
119	能く	能の	c
120	も（ママ）じや	物なれハ	d
121	とあつて	とて	c
122	人皆	皆人	c
123	御頂愛	御賞くわん	c
124	なさる丶事ハ	なれハ	c
125	数かぎりも無い事しや	某にかつ事はなるまいそ	b
126	×	中〻	a
127	×	や	a
128	花ハ	とかくハない	c
129	植置させられた	植置せられせられ（ママ）	e
130	人皆	×	a
131	なさるれバ	あれハ	c
132	中にも	中に	d
133	物ハ	事か	c
134	あるまい	ならふか	c
135	汝こそ	おのれをこそ	c
136	一礼	一礼を	d
137	汝に	おのれに	c
138	見するぞ	見せふ	d
139	ハ……	笑	c
140	物	ものを	d
141	さぞ	×	a
142	こわかろふぞ	おそろしかろふそ	c
143	汝に	×	a
144	法量か	ほうりやうも	d
145	汝に	おのれに	c

	馬瀬中林本	馬瀬文化二年本	違い
187	×	扨くものを仰山におしやる	a
188	×	たとへ	a
189	押寄せた	押寄てくる	d
190	とて	と有て	c
191	あふ（ママ）	あろふそ	d
192	いや〳〵そふてない事て御座る	×	a
193	×	去なから	a
194	さうあらバ、ともかくも致しませう	夫ならは心得た	b
195	×	ワキ座へ並フ。ウシロへ向也	a
196	心得ました	×	a
197	×	扨くこなたハ油断な者しや。何れそなたか知せすハ、思ひかけハ有まい。真中へ出ル	a
198	×	何と	a
199	×	向合ス	a
200	×	大方	a
201	御座りまする	御りやる	c☆
202	先す	×	a
203	×	ワキ座ニ並ヒ立ツ	a
204	よふ御座りませう	一段とよからふ	b☆
205	×	シテ茄子　橋掛ニテ謡一セイツヨク	a
206	×	ゑいや〳〵ゑい〳〵を丶。橘立テ居テ	a
207	×	打切	a
208	やが（ママ）ての	寄ての	e
209	たれ〳〵ぞ	とれ〳〵そ	c
210	×	打切	a
211	深かけれとも	ふかけれと	d
212	エイヤ〳〵	×	a
213	嵐	山風	c

等がある。こうした形が認められるのは、馬瀬中林本が実際に台本として用いられていた可能性を示すものであろう。

また、No.24やNo.41、No.115、No.187、No.197等は、馬瀬中林本に該当する内容の詞章が一切ない。特にNo.115は、橘の精が茄子の精に対して、橘が古歌に詠まれたことを説明する重要な表現が含まれている箇所である。が、前後を確認すると、

（橘）「某か事ハ昔より何れの歌人も様々歌に読まれた事じや。※

（茄）「歌はともあれ、何れの貴人高位も御食事になされ（後略）

馬瀬文化二年本では、No.115の詞章が※印の所に入るが、馬瀬中林本では、橘の精の台詞を傍線部の茄子の精の台詞で受けることにより、橘に関する古歌が示されなくても違和感のない展開となっている。No.24以下の箇所も同様に、その詞章がなくとも前後の展開に大きな影響を与えるものではないと判断されることから、写し誤りというよりも、削除した可能性が考えられる。逆に馬瀬文化二年本に該当箇所がなく、馬瀬中林本で付加された箇所は、No.11やNo.25の「イヤ」やNo.42の「いかにも」といった一語単位で、語調を調えるものか、その場の動きを円滑にするための台詞（No.186の「先ず是へ寄ってこしらへをさしませ」）等である。このような語の追加も台本を整備した跡と言えよう。

また、詞章を簡略化する馬瀬中林本の傾向は、a以外の箇所にも認められる。No.16は茄子の名ノリの中で、

中　山桜が盛りじやと申す。

文　毎年春に成レハ、此かたはらの山桜を見物ニ参る。漸く盛りしやと申程に、

とあり、必要な情報のみの提示となる。またNo.33の橘の精が、やって来た茄子の精に声をかけ、茄子の精が応える場面では、

中　花見が為め罷出でたが、

文　山桜か見事に咲たと聞たによって、見物にゆく事しやか、

と違いが認められる。この後の展開で、橘の精が茄子の精の話を聞き、自分も「花見の為」に訪れたことを答える台詞があることから、馬瀬文化二年本ではそれとは重ならない表現にしていたと思われるが、馬瀬中林本では同じ表現を繰り返す形にしている。この他、橘の精の名ノリの「誠に花ハ数々多けれとも〜人皆な御賞感なさるゝ」が茄子の精の名ノリの「誠に花は数々多けれとも〜人皆御賞感なさる、事じや」（No.19・23）で繰り返される例も、同様のものと考えられる。このように同じ表現を重ねることで、橘の精と茄子の精が同じ花見に来たことを強調しつつ、台詞を覚える負担も軽減することになろう。

上記の詞章以外で注目されるところとして、前稿の「今神明」で指摘した、敬意を含んだ丁寧な表現が、本曲でも指摘できる。☆印の箇所が一七箇所、★印の箇所が四箇所ある。No.43の「致しましよふ／致ふ」やNo.81「おわらやるぞ／わろふそ」等である。他の曲も比較・検討する必要があるが、馬瀬文化二年本から馬瀬中林本へ移行する中で、更に丁寧な表現を用いる傾向が指摘できるだろう。また、馬瀬中林本をまとめる際の方法として、習得した口伝の台詞を思い起こしながら書き留めるというより、何らかの台本を書写してまとめたと考えられる痕跡がある。No.208の「やがての／寄ての」とNo.213の「嵐／山風」である。「やかて」の「や」と「か」は「寄」の「宀」を「や」に、「奇」を「可」として記した可能性が考えられる。No.213も同様に「山風」を「嵐」一字と見たものだろう。こうした箇所は、書写の際に生じた事例と考えられるのではないか。また馬瀬文化二年本のみがBグループの諸本と異なり、書き誤りと思われるNo.209「たれ〳〵ぞ／とれ〳〵そ」は、和泉流諸本で謡われた精確な形（「たれ〳〵ぞ」）で記されている。こうした状況を鑑みると、「木実論」の台本は、馬瀬文化二年本だけでなく、他にも馬瀬で伝承された台本があったことが推測されるだろう。

おわりに

馬瀬での「木実論」の上演記録は、一回確認される。『狂言番組扣』の「同（明治四拾四年二月）十七日野村追善七拾年祭」の七番目に

定之助　林宮造
木実争　中川利吉
七松
吉松
三次郎

とある。この明治四四年から二月の上演となり[13]、この前日に例年行われている、馬瀬神社への奉納狂言があり、その翌日に催されたものである。「野村追善七拾年祭」の「野村」とは、馬瀬狂言を天保頃に指導していた

和泉流狂言師の野村玉泉のことを指すと考えられる。馬瀬町にはこの玉泉の墓が残っている。その墓碑銘には

天保十二丑年極月十七日　行年満八十歳卒

とあることから、天保一二年（一八四一）から七〇年後の追善狂言を月命日である一七日に行ったものであろう。当日行われた番組（一一曲）には「狸腹鼓」（当日は休演）等の大曲が並んでおり、「木実論」も追善狂言に花を添える曲として、上演されたのであろう。馬瀬文化二年本以降も曲が伝承されていたものと思われる。

今回の調査の結果、馬瀬文化二年本と共通性のある資料として、『狂言口授箋』と茶表紙本を新たに指摘した。本稿で取り上げた「木実論」は詞章の揺れが比較的少なく、伝承されてきた曲と言えるが、曲によって、諸本の関係性は大きく異なる。馬瀬狂言の「木実論」は、馬瀬文化二年本に、江戸後期の和泉流山脇派の『狂言口授箋』・宗家系本と共通する詞章が認められ、その後、馬瀬文化二年本の詞章を元に、台詞の簡略化等の手が加えられ、より演じやすい形に調えられたのが、馬瀬中林本であったのだろう。本曲の変遷においても、これまで指摘した曲の簡略化の流れが確認できた。本曲も前稿の「今神明」と同様に、文化年間前後に和泉流山脇派の詞章が馬瀬に伝承されていたことを示すものと言える。今回新たに確認できた和泉流山脇派の台本も併せて比較・検討を行い、馬瀬文化二年本全体の位置づけを明らかにしていきたい。

注

1　拙稿「馬瀬狂言資料の紹介（10）―「鳶礫」について」（『学苑』929　二〇一八・三）、「馬瀬狂言資料の紹介（11）―「今神明」について―」（『学苑』939　二〇一九・一）参照

2　山脇派の諸本が「木実論」と表記していることから、本稿では以下「木実論」とし、必要に応じ流儀毎の表記を示すこととする。

3　橋本朝生著『続　狂言の形成と展開』（瑞木書房・二〇一二）所収。各資料の名称もこの論考に準ずる。

4　資料として使用した台本と台本に関する参考文献は以下の通りである。

なお、原文を引用する場合は、適宜句読点を付した。また、各本の原文を提示する際には、台本名の一字（傍線部）を用いて示した（馬瀬文化二年本は「文」、馬瀬中林本は「中」とした）。

天理本『天理本狂言六義』（北川忠彦他校注・三弥井書店・一九九五）から引用。

参考文献としては、『狂言六義』（天理図書館善本叢書23・24・天理大学出版部・一九七五）、『狂言六義全注』（北原保雄、小林賢次著・勉誠社・一九九一）。

和泉家古本『古狂言台本の発達に関しての書誌的研究』（池田廣司著・風間書房・一九六七）、『日本庶民文化史料集成　4狂言』（芸能史研究会編・三一書房・一九七五）

5　波形本　法政大学能楽研究所蔵の紙焼写真にて確認

和泉流宗家系狂言本　法政大学能楽研究所蔵『横本和泉流狂言本』

古典文庫本　『和泉流狂言集』（古典文庫・一九五三～一九六二）

狂言集成　『狂言集成』（野々村戒三、安藤常次郎共編・能楽書林・一九七四）

茶表紙本　法政大学能楽研究所蔵『狂言本茶表紙六儀』

狂言口授箋　国立国会図書館蔵『狂言口授箋』

6　今回の分類には、内容が確認できていない台本が含まれるが、関連のあるグループに配した。雲形本は、雲形本の増補とされる古典文庫本と同じBグループに、和泉流三宅本と愛泉社旧蔵三宅派本は、Ⅱ三宅派にそれぞれ分けた。

7　〈　〉の番号は、前掲注3の橋本朝生氏のご論考で付されたものである。

8　この和歌は『狂言三百番集　下』（野々村戒三、安藤常次郎校註・冨山房・一九四二）では、「橘は。實さへ花さへその葉さへ。霜は置くともたゞ常磐なれ」とあり、この形が正しいものと考える。

波形本は「匂ひとぞ」だが、その他は表1の通り、「匂ひにぞ」である。

9 雲形本研究会「和泉流狂言台本の比較研究―『雲形本』を中心に―」（『名古屋芸能文化』三・一九九三・一二）、佐藤友彦・林和利「和泉流山脇派狂言の特徴―三宅派との比較」（『楽劇学』五　一九九八・三）

10 本表において、「近似」とは、馬瀬文化二年本と一致するものがなく、表現が近似する（一語異なる等）場合を指す。

11 橋本朝生氏は、この本の成立年代を江戸後期と推定されている（前掲注3参照）。

12 拙稿「馬瀬狂言資料の紹介（1）―「狂言番組扣」を中心に―」（『学苑』696 一九九八・三）、「馬瀬狂言資料の紹介（2）―台本に見える上演記録・曲名索引―」（『学苑』703　一九九八・一一）参照。

13 この前年の番組が残っていないので、明確ではないものが、番組の始めに「神事改正」とあることからもこの年での変更と考える。

【翻刻】

〈凡例〉

一、この本文は、馬瀬文化二年本（中屋豊和氏蔵『狂言六義』（所蔵番号　中屋豊和七ノ三））の「木実論」と馬瀬中林本（馬瀬狂言保存会蔵『名取川　木実争　三人片輪　太鼓次第一声』（所蔵番号　中林慶三　三〇ノ一四））を翻刻したものである。

一、翻刻にあたっては、原則として現在通行の字体を用い、適宜句読点を付した（当て字・反復記号「丶」「ゝ」「〻」「〳〵」は底本のままとした）。また見せ消ちの箇所は、補筆訂正された語句を採用した。

一、仮名遣いについては、底本の通りとした。清濁、振り仮名も底本のままである。

一、セリフの初めの「└」の記号は「に統一した。役名の記載がない場合は、適宜（　）で補った。

一、底本における誤脱と判断される不審箇所には「ママ」を付した。

馬瀬文化二年本「木実論」（『狂言六義』（中屋豊和七ノ三））

1乱序ニテ出ル外名乗橘（ア）か様候者ハ、橘の精て御座る。承われハあた近（ママ）きに桜か盛しやと申。今日ハ山へ登って花見を致ふとそんする。誠に花は色〻多けれとも、桜ハ一しほ見事な物なれは、皆人しやうくわんなさる丶事しや。今日ハ緩りと見物致ふとそんする。何かと言中ニふもとしや。是にやすんて、追付山へ登ふとそんする。笛座ノ向座ス13シテ茄子「罷出たるハ者（ママ）ハ、茄子の精て御座る。毎年春に成レハ、此かたはらの山桜を見物ニ参る。漸〻盛りしやと申程に、花見に参ふと存ル。誠に花の中ニも桜の花ハ見事なによって、今時分花見桜狩抔と申て、殊の外賑〻敷事しや。さくらの花にあやかりたい事しや。「あれへ何者やら参った。言葉をかけふ。是〻。（ア）此方の事て御座るか。「中〻そなたの事しや。とれからとれへ御ゆきやるそ。（ア）某ハ茄子の精しやか、山桜か」47ウ　見事に咲たと聞たによって、見物にゆく事しやか、そなたハ誰ておりやるそ。（ア）某橘の精しやか、花見為罷出たか、いかふくたひれたて、此所に休んて居た。幸しや。同道仕ふ。「某もつれかほしいと思ふたに一段しや。同道致ふ。「左右あらはゆかしませ。（ア）何かさて御先しや。先ゆかしませ。（ア）某から参ふか。（ア）一段とよふおりやろふ。さア〳〵来さしませ。「心得た。「ふと詞をかけたに早速同心めされて、此様なよろこはしい事ハない。（ア）花見も独りハ面白ない。互に緩りと咄そふそ。ワキ座へ行「イヤ此あたりから花か有ルハ。ナ「もそつと奥山へ行しませ。タ「心得た。廻リ掛リ橋掛ヲ見ルハ丶ア咲たり〳〵。見事な事かな。（ア）扨〻おひた丶しい花ておりやる。留テ正面見ル　（ア）此谷へ見おろした所抔ハ、一しを見事しや。（ア）見へ渡つた所ハ皆桜しや。「いつれおしやる通り、花の時分ハ此あたりハ只桜計の様に見ゆる。「誠に言ならハした通り、花のはしりほに咲たと言ハ、此様な事てあろふ。扨〻見事な事しや。」48オ「ヤ、何とおいやる。（ア）はしりほに咲たといふ事しや。「はしりほ〳〵。笑「是〻そなたハ何をわろふそ。（ア）はしり

ほと言ふハ、耕昨の上にこそ有事なれ。花の咲たに何そやはしりほ〳〵。笑一其様におわらやる事ハなるまい。是ハむかしより和歌に様〻読れた事しや。「其古歌ハ何とゆふ事しやの。「そちハおしりやるまい。芳野山キンスル たか植そめし桜たにかすさきそむる花のはしりほ。「又くわいた。笑「其様におわらやる事ハなりまするまい。是ハ黒主のよまれた哥しや。「黒主の哥ハそれかしもよふ存して居る。吉野山たか植初し桜たに数盛そむる花のはしめそとこそあれ、いつのならいに花のはしりほ。笑「やい〳〵。「何しや。「是ハ某か覚へ違ひもあろふか、何そやいやしい茄子のふんとして、身共をわろふ事ハ成まいそ。（ア）扨〻聞にくい事を言ふものしや。某を賤しい者とハ何事しや。汝に」48ウ まくる某てない、やい。（ア）いらぬ事を言ふ。某か事ハ昔より、何れの哥人も様〻哥に読れた事ハ数限りもない事しやいやい。「夫ハ何といふ哥しや。（ア）君か代に枝もならさて吹風ハ花橘のにほひにそ知ると、か様に目出度哥も有ルか、そちか様な物を、哥によまれた事ハ聞た事かない。「いや哥ハともあれ、それかしハいか成貴人高位も御喰事ニなされ、能のよい物なれハとて、皆人御賞くわんなれハ、某にかつ事はなるまいそ。（ア）扨〻おかしい事をいふ。貴人高位に用ひらる、事ハ、中〻それかしに及ふ事ハなるまい。や、今こそ思ひ出した。とかくハない一天の君も紫震殿の御前へに植置せられ（ママ）せられ、右近の橘とて御てうあいあれハ、草木の中に某につ、く事かならふか。おのれをこそしさつて急度一礼を仕い。「おのれに何の一礼を仕ふそ。「一礼せすハ目に物を見せふ。「そりや誰か。「某か。「笑 そちか目にものを見せたらは、」49オ おそろしかろふそ。「扨〻口のすきたやつの。物を言せて置ハほうりやうもない。「おのれにまけふか。「いさこい。「さアこい。 相撲之様ニ組合（ア）イヤ〳〵。（ア）おのれかような者ハ、まつかうしておかふ。覚へか（ママ）〳〵。ナスヒヲコカシ扇デタ、ク（ア）おのれそれかしを此様に打擲をした程に、今に目に物を見せふそ。（ア）おのれまた其つれな事をゆふ。またそこにおるか（ママ）〳〵。（ア）のふはらたちや〳〵。今にくやまふそ〳〵。 中入橋掛マテ追込テ戻ル（ア）扨〻にくい事かな。あのような者をもの（ママ）を只おけは、ほうりやうもないにようて、今のようにした。扨〻よひきみしや。是から某はかり緩りと花見を致ふ。又笛座ノ向へ座ス（ア）やア〳〵夫ハ誠か、扨〻にか〳〵しひ事しや。何としてけんくわをせられた事そ。橘ハとれ居らる、そ。いやのふ〳〵。（ア）扨〻あわた、しい。何事しや。（ア）何事とゆふ事かあるものか。只今茄子のせいとけんくわをせられて、さん〳〵打擲を召れたと聞たか、何とした事しや。「されハいかふ」49ウ 口をすこしたによって、それゆへ打擲をした。「た、かれてはらか立とゆふて、大勢木のみのせいをかたろふて、今に是へ押寄てくると有る。（ア）扨〻ものを仰山（ぎやうさん）におしやる。たとへいかほと押寄てくると有て、何ほとの事かあろふそ。「去なから大勢くると聞たによって、某もかせいにきた。先拵をさしませ。（ア）夫ならは心得た。（ア）先是へよらしませ。ワキ座へ並フ。ウシロへ向也（ア）扨〻こなたハ油断な者しや。（ア）何れそなたか知せすハ、思ひかけハ有まい。真中へ出ル（ア）何と拵ハよふおりやるか。向合ス（ア）大方よふ御りやる。こなたもすいふん精を出しておくりやれ。（ア）気遣おしやるな。是へよって待ませふ。ワキ座ニ並ヒ立ツ（ア）一段とよからふ。シテ茄子 橋掛ニテ謡一セイツヨク（ア）言の葉に争ふ今の恨みそと心もたけくおしよする、（ア）ゑいや〳〵ゑい〳〵を、。 橘立テ居テ「味方のせいわ是を見て（同打切）〳〵 昔も今もはなやかなる橘の何某、いろ〳〵しきハ桜の十郎、柿の」50オ 本にハ人もありの実。つふてを打やつはい桃。かすにハあらねと実柑金かん。たてにハつへをつかせつ、。おめきさけんて掛りけり〳〵。（同打切）シテ「寄ての勢ハとれ〳〵そ〳〵。茄子の与市を始として。ゆのかわの三郎太郎、栗の伊賀の守。都も近し梅津の何某。す、しき出立なつめ殿。胡枡山枡。つみふかけれと一念に。うかみかくれる菩提樹かな。〳〵。ゑいたう〳〵。 橘「ゑいや〳〵。同音「ゑい〳〵を、。 橘「勝ったそ〳〵。茄子「其時茄子ハ腹をたて（舞働）同「やら〳〵ふしきや不思儀やな。俄に山風吹おちて、梢をはらいしは吹かへす如くなり。ゑいその風もふくやと計り、あら〳〵さむやあらさむや。 茄「あそこや爰にか、」50ウ めとも、（同）さむきハ山の木の実の精かいかならん〳〵と我山〻にそ帰りける。

シテ茄子　着付段のしめ　ク、リ袴　袍壺折（ママ）　面ウソ吹　頭巾

後　ソハツキ　黒タレ　割ハサミ持　茄子作り物を戴ク

橘　小袖　小格子　狩衣　白タレ大口　風折烏帽子　面　鼻引か登り髭か

後　橘の作り物を戴ク　棒をもつ

柿　小袖嶋かあつ板かく、り袴ニ掛ケ素袍か但シモキトウニテモ　頭巾異風か吉

面賢徳赤キ色か吉　後ハタスキ掛ル　かつら帯ニテ

立衆　小袖見合せク、リ袴　水衣又ハモキトウ　黒タル（ママ）又ハ色〻頭巾　毛頭巾抔

モ吉

万葉集ニ清輔之歌　此哥吉

君か代に枝をならさて吹風ハ花たちはなの匂ひにそしる

行末ハ幾万代もとふくまし花橘の実こそしるらめ

此哥已前ハ用ひ候へ共わろし」51オ

馬瀬中林本「木実争」

（『名取川　木実争　三人片輪　太皷次第一声』（中林慶三　三〇ノ一四））

「斯様（カヨウ）に候者ハ橘の性（セイ）で御座る。承われバあなた近（ママ）きに桜が盛りじやと申すに依て、今日た山へ登り花見を致さふと存る。誠に花ハ数々多けれとも、桜の花ハひとしゆふ見事しやに依て、人皆な御賞感なさるゝ。今日たゆるりと見物致さふと存る。いや何かと云ふ内麓じや。此所にやすろふで居て、追付け山へ登らふと存る。「罷出でたる者は、茄子の性で御座る。山桜が盛りじやと申す。今日た山へ登り、花見を致さふと存する。誠に花ハ数々多けれとも、桜の花ハひとしゆふ見事しやに依て、此頃花見桜かりと申て、人皆御賞感なさる、事じや。「イヤあれへ何者やらか通る。」7オ　言葉をかけよふ。やあのふ〳〵、これ〳〵。「ハ、ア、此方の事で御座るか。「いかにもそなたの事じやが、とれからとれへ御出でなさる、。「某ハ茄子の性じやが、花見が為め罷出でたが、こなたか何（ママ）で御りやる。「某ハ橘の性じやが、花見か為め、罷出でた。いこふくたひれて此所にやすろふで居た。さいわいじや。同道致さふ。「いかにも同道致しましよふ。「さうあらバ先ず御出でなされませ。「何が扨、こなた御先きしやもの、こなたから御出でなされませ。「さうあらバ某がしから参らふか。「一段とよふ御座りませう。「さあ〳〵ごされ。「心得ました。「ふと言葉をかけたに、早速同心めされて此様なよろこばしい事ハ御座らぬ。」7ウ　（ア）花見も一人でハ面白ない。今日たゆるりと見物致しませう。「一段とよふ御座りませう。ハ、ア此当りから花かあるハ。「もそつと奥山へ行かしませ。「心得ました。「ハ、ア咲たり〳〵。おびたゞしい花で御座る。「此谷へ（ママ）見おろした所が一としゆふ見事じや。「見へ渡つた所が皆桜じや。「おしやる通り、此当りハ桜ばかりの様に見ゆる。「云ひならハした通り、花のはしりほに咲たと云ふハ此事であらふ。「何と仰せらるゝ。「はしりほに咲たと云ふ事じや。「なんじや、はしりほ〳〵笑ハ……。「やあこれ〳〵こなたわ何をおわらやるぞ。「はしりほに咲たと云ふハ、実乗り作（ママ）咲の上にある事なれ、いつのならいにはしりほ〳〵ハ……。「やあこれ〳〵、是ハ昔より歌に読まれた事しや。「其歌ハ何と」8オ　云ふ歌しやの。「そちハ御知りやるまい。吉野山たか植（ソ）へ初めし桜だに数ず咲き初むる花のはしりほ。「又加へた。ハ……。「やあこれ〳〵、是は黒主の読まれた歌で御座るそや。「黒主の歌は某かしもよふ存じて居る。

吉野山たか植へ初めし桜たに数さき初むる花のはじめぞ

と云とこそあれ、いのなら（ママ）いに　はしりほ〳〵。ハ……。「おふやい〳〵。「なんじや。「それハ夫がしか覚へちかいもあらふに、なんぞやいやしい茄子ぶんとして、某かしを笑ふ事ハなるまい。」8ウ　「扨々聞きにくい事を云ふ。某かしをあさ（ママ）しい者とハ何しや。汝に敗くる夫がしてない。「某か事ハ昔より何れの歌人も様々歌に読まれた事じや。「歌ハともあれ、何れの貴人高位も御食事になされ能く〳〵よいもじ（ママ）やとあつて、人皆御頂愛なさる、事ハ、数かぎりも無い事し

や。「扨々おかしい事を云ふ。貴人公位に持ふらるゝ事ハ、[126]夫かしに及ふ事ハなるまい。[127]今こそ思ひ出した。花ハ一天の君も紫震殿の御前に植置させられた右近[128]の橘とて、人皆御頂愛なさるれバ、草木の中にも某がしにつゝく物ハあるまい。[129]汝こそしさつてきつと一礼仕れい。「汝に何の一礼を仕ふぞ。「一礼せすバ目に[130]物を見するぞ。「そりやたれが。「夫かしが。「ハ……。そちか目に物見せたら[131]ハさぞこわかろふぞ。「扨て〳〵口の過ぎたやつの、汝に」9オ　物を云わせて[132]置けハ法量かない。「汝に敗けよふか。「いさこい。「さあこい。「イヤア。[133]「イヤア。「とつたぞ。「是は何とする。「何と、云ふ事かあるものか。「うのれ[134]か様ふな者ハまつこふして置いたかよい。覚へたか〳〵。「あいた〳〵、うのれ[135]夫かしを此様に、打のべをして、今に目に物を見するぞ。「うのれまた其つれを[136]云ふ。また是に居るか〳〵〳〵〳〵〳〵。注につくいやつの。扨々にが〳〵し[137]い事で御座る。あの様な者に物を云わせて置けハ法量かないに依て、今の様にし[138]た。是から夫かしバかりゆるりと見物致さふと存る。「扨て〳〵にか〳〵しい事[139]て御座る。今に目に物を見するぞ〳〵。茄子中入　「やあ〳〵何と云ふぞ。只今茄[140]子の性勢と喧嘩をせられ、さん〴〵打のべをせられた、かれて、腹が立つとあつ[141]て、」9ウ　大勢木の実の勢をかたろふて、押寄せてくるある。ママは て此橘ハとれ[142]居るそしらぬ〳〵、やあのふ〳〵。「おひたゞしひ、何事しや。「何事と云ふ事[143]があらふか。只今茄子の性と喧嘩をせられさん〴〵打のへをせられたと聞きまし[144]たが、何とした事で御座る。「されバの事て御座る。いこふ口を過こいたに依て、[145]今の様にした。「たゝかれて腹か立つとあつて、大勢木の実の勢をかたらふて、[146]是へ押寄せてくるとある。先ず是へ寄ってこしらへをさしませ。「如何程押寄せ[147]たとて、何程の事かあふ。「いや〳〵そふてない事て御座る。ママ大勢くると聞いた[148]に依て、夫かしも加勢に来た。先すこしらへをさしませい。「さうあらバ、とも[149]かくも致しませう。「先す是へよらしませ。「心得ました。「こしらへハ好ふ[150]をりやるか。「よふ御座りまする。」10オ　こなたも随分勢を出して御くりやれ。[151]「気支へ御しやるな。先す是へ寄て待ちませう。「よふ御座りませう。（ロ）言の[152]葉にあらそふ今の恨みぞと心もたけく押し寄する、「味方の勢ハ是を見て〳〵[153]昔も今もはなやかなる橘の何がし、いろ〳〵しきハ桜の十郎、柿の本にハ人もあ[154]りの実。つふてを打やつはい桃。かすにハあらねとみかん金かん。」10ウ　たてに[155]ハ杖をつかせつゝ、おめきさけんてかゝりけり〳〵。シテ「やがての勢ハた[156]れ〳〵ぞ〳〵。茄子の与市を始めとして。ゆの皮の三郎太郎、栗の伊賀守、都も[157]近し梅津の何にがし。涼しき出で立ち夏梅殿。胡枡山枡。つみ深かけれとも一念[158]に。うかみかくれるぼだいじゆかな。「エイヤ〳〵。「エイト〳〵。「エイ[159]ヤ〳〵。「エイ〳〵ヲヽ。「勝たそ〳〵〳〵〳〵。」11オ　「其時茄子ハ腸をたて、[160]舞働キ　「其時茄子ハ腸を立てやら〳〵ふしきやふしぎやな、俄に嵐吹おちて梢を[161]はらいしは吹かへす如くなり。ゑいその風も吹くやと計りあら〳〵さむやあらさ[162]むや。「あそこやこゝにかゞめども、さむきハ山の木の実の勢か」11ウ　いかな[163]らん〳〵と我か山々にぞ帰りける」12オ

注　この茄子の精の中入前後の台詞は、台本によって前後して記されている。馬瀬中林本では、この後も橘の精の台詞（「扨々にが〳〵しい事で御座る～見物致さふと存る」）が続き、その後茄子の台詞で、中入となる。馬瀬文化二年本では、茄子の精が「のふはらたちや〳〵、今にくやまふそ〳〵」と言って中入した後に、橘の精の「扨々にくい事かな」という台詞になる。表3にはそれぞれ該当するものを対照させた。

〈付記〉

本稿を成すにあたり、貴重な資料の調査のご許可、並びにご高配を賜りました馬瀬狂言保存会会長河原良治氏をはじめ、会員の方々に改めて深謝申し上げます。また資料調査にご高配を賜りました法政大学能楽研究所に深謝申し上げます。

（やまもと　あきこ　日本語日本文学科）